

私のモチーフ

マネキン

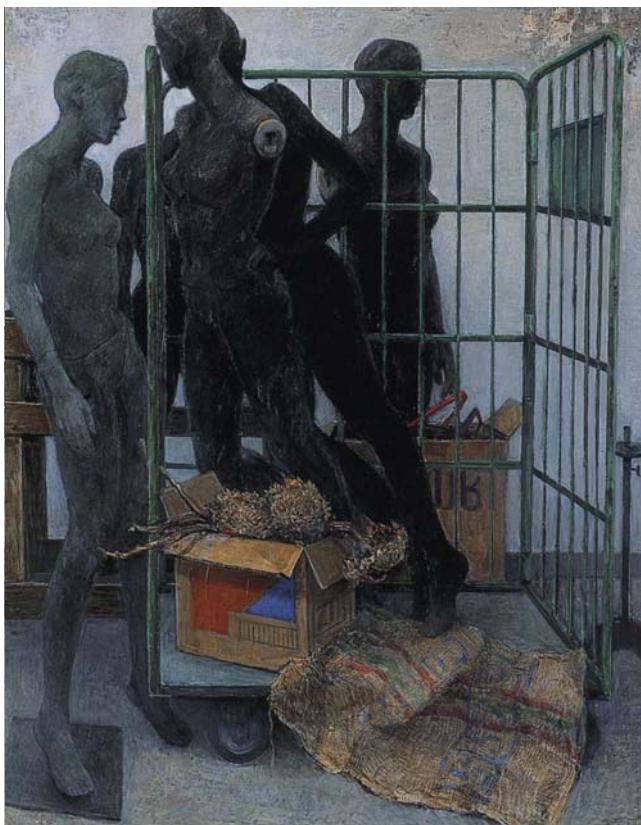
会員 阿戸 猛子

出会いはデパートの地下倉庫、地元の絵画団体の作品搬入の折、元来の役を終え無造作につみ上げられ、やがて捨てられるであろうその姿が当時の私の心と一体化して来たのである。

絵を描く事に迷いを持ち悩んでいた頃、生前の夫は大きな一言を残し

て旅立った。「絵を趣味と思うな。仕事と思え」とそのことばが私の大きな支えとなっているのである。

真白のキンバヌに対象物を浮び上がらせるには自分自身をしっかりと見つめ、身を削る苦しみの中から初めて描くものに魂が入るのではないか。



▲ 喚呼

大作を描き上げると「うことは五

教科、即ち国語、数学、理科、社会、音楽の勉強をしているような事だ」と。物語を感じなくてはならぬメロディーがなくてはならぬ。社会情勢が感じられなくてはならぬ。等々執念を持つて心の叫び、ため息、わずかな安らぎ、を彼等に託して描いているのである。

彼の日、デパートの方に地下のマネキン人形を数体譲つてももらえないかとお願いしたところ二つ返事で全部持つて行つてとのうれしい返事をいただいた。以来二十余年、私の分身として三十体以上のマネキンが朝夕なに私に語りかけてくれるので

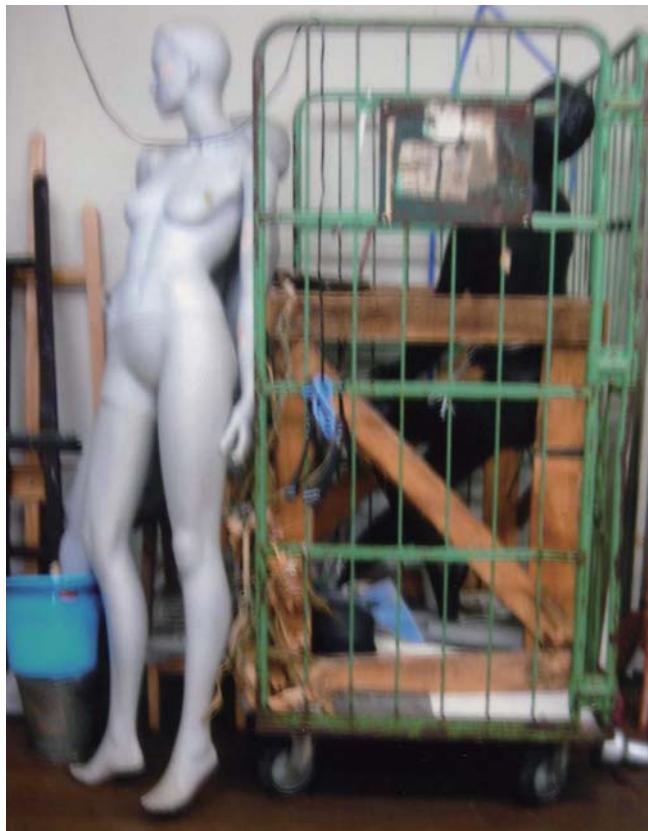
す。わずかな腰の捻り、背の角度、指先の動き、目をこらしてデッサンをしていると、自分がマネキン人形なのか、マネキン人形が自分なのか混同して来るのです。



▲ デパート倉庫（写真）



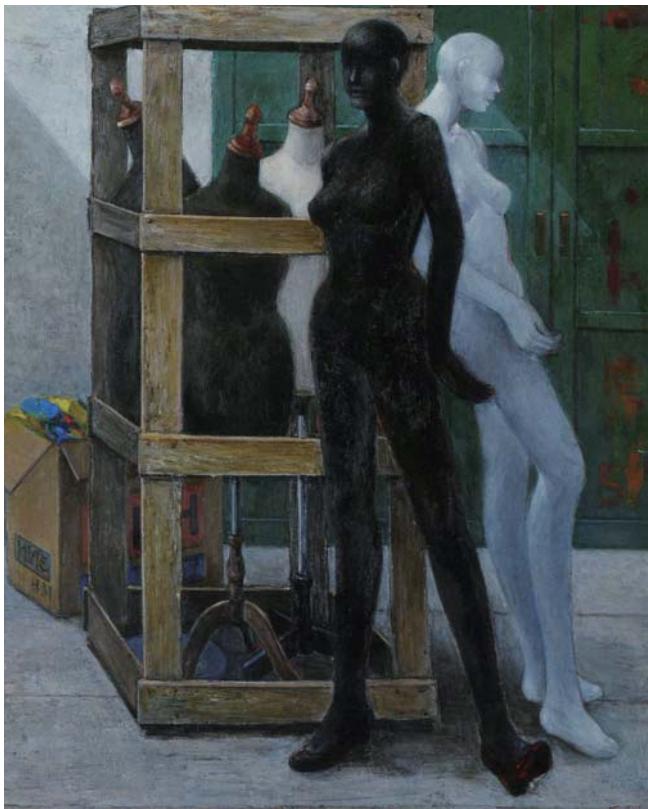
▲ 一隅



▲ アトリエのマネキン（写真）



▲ 待つ



▲ 陽ざし